

開幕前日からの参加を体験して

日頃より、科学技術や思想、規範、芸術といったいろいろな事柄を学ぶ中で、何か一つでも新たな価値を創出していきたいと考えています。最近では、nakabanさん(画家)やtupera tuperaさん(クリエイティブユニット)、日本デザインセンターの方々と協同制作を重ねながら、アートやデザインの捉え方や考え方について思索しているところです。このような折に、亀山トリエンナーレ2024を体験できたことを大変ありがたく思っています。

また今回は、トリエンナーレの開幕前日から参加することが叶い、事務局や参加アーティストの方々と意見交換を深める貴重な機会に恵まれました。開幕前ということで、自らもまるで主催者や展示者のような空気を身にまといながら、アート作品の制作過程や展示方法、亀山トリエンナーレに対する想いや情熱、さらにはアート作品やアーティスト、そしてアートについての考えや語りを尋ね歩きました。とりわけ、アーティストから伺った制作過程における苦悩や、作品完成時に感じる「ピタッ」とした瞬間の認識、作品の輸送上の工夫、会場での展示方法の練り直し、さらには、ふと他の作品と向き合った際の共感などは、舞台裏の奥深さを知る貴重な契機となりました。

開幕日になると、雰囲気は一変しました。さまざまな緊張感や刺激、期待が交錯し、「ワクワクする場」が立ち現れていました。人と自然、アート作品といった関係にとどまらず、地域や歴史、文化などが共鳴し合う魅力的で活気ある空間です。何よりも、このような環境に身を置いたことで、私の中で「文化」という言葉の意味が大きく変わりました。文化というのは、巨大で捉えがたい何かではなく、もっと身近にある、その場その瞬間ごとにキラッと輝く星のかけらのようなものの集まりなのではないかと、捉え直すようになりました。

振り返って所感を述べるにあたり、芸術祭はなぜ必要なのかという基本的な問いが浮かび上がりました。この問いに対しては十人十色の答えがありそうですが、現時点での私の回答は、「周囲の心を温めつつ、つなげ、日々の喜びを共に享受するため」です。

近年、芸術祭に注目が集まっている背景には、このような「心の豊かさ」への切望があるのではないのでしょうか。地域に根差し発展してきた「亀山トリエンナーレ」には、まさに心の豊かさを創出し続ける希望が溢れているように感じます。